

中国の力強さとともに発展する日本人学校

～ 広州日本人学校の実践より～

前 広州日本人学校

現 清水町立清水中学校 小室 彰人



1 はじめに

2004年4月、念願かなって在外教育施設派遣教員となることができた。構想5年、受験3回。やっとの思いでつかみ取った夢であった。どうしてそこまでして日本人学校で働きたかったのだろうか。

面接では、「あなたが派遣される予定の国では税制の関係で本給にまで課税されるおそれがあるが、それでもよいか。」と尋ねられた。それでも意志は変わらなかった。お金には変えられない仕事ができる。たぶんそんな思いから在外教員になってみたかったのだろう。おかげさまで3年間の勤務は私にとってすばらしい経験となった。(幸い課税もされずにすんだ)その一端をご紹介しますと思う。

2 派遣国 中国 広州

ご存じの通り中国は世界一の人口(13億人)を有する国である。私が派遣された広州は上海、北京に次いで中国第3の都市である。最近ではホンダ・日産・トヨタの自動車3社が広州に進出、広州市は「中国のデトロイトとなる」ことを宣言するほど自動車産業に力を入れている。特にホンダはいち早く広州に工場を造り、広州人にとってはトヨタよりホンダの方がネームバリューがあ



り、日本企業の顔にもなっている。戸籍総人口は737万人だが、出稼ぎ労働者など広州戸籍を持たない居住者を加えると人口は1000万人を越すとされている。

市民の平均年収は3万1025元（約47万円）、農村の平均年収は6625元（約10万円）と都市と農村の格差は想像以上に大きいことがわかる。社会主義経済の国家であるがその格差は資本主義経済の日本をはるかに超えている。「日本が世界で唯一成功した社会主義の国だ」といわれたことがあるが、なぜか納得してしまう言葉だ。日本も格差が問題になってきているとはいえ、まだまだ平均的で平等だと感じた。

広州市内北部を北回帰線が横断しており、春分の日には「北回帰線公園」へ社会科見学に出かけたこともあった。自分の影が真下に来る不思議さを実感した。中国第3の河川「珠江」が市中心部を流れる。香港へは高速鉄道で約2時間、マカオへは高速道路を利用し約2時間弱の距離。首都北京とは京広鉄道、京珠高速道路で結ばれている。

気候は亜熱帯で、年平均気温21.7度、年間平均降雨量1982.7ミリと温暖多湿で、夏季が長い。日照時間も長く、一年を通じて花の絶えることがないので広州のことを別名「花城」とも呼ばれる。

広州で広く使われている言語は普通語と広東語。広東語には普通語とは違う文法体系や広東語独自の漢字などもあり、普通語と広東語は「英語とドイツ語ほどに違う」とも言われている。標準語教育の普及により広州でも都市部ではほとんど普通語が通じるようになっている。中国の学校では授業はすべて普通語で行われていたが、友達同士では広東語を使っている光景も見られた。

「食は広州にあり」といわれるくらい食材も豊富で、どれもおいしい。広東料理は海鮮を多く使い、素材の持ち味を生かしたあっさりとした味付けが特徴である。生活の中には医食同源の考え方根付いており、食事は必ずスープからとる。広州のレストランの営業時間は朝の「早茶」から、昼食「午市」、午後の飲茶「下午茶」、夕食「晚市」、夜の飲茶「夜茶」まで。朝早くから深夜まで営業している。



広州の人々は生活の中で道教の暦を大切にしており、よく縁起を担ぐ。結婚式やセレモニーなどはかならず吉日を選ぶ。それも縁起のよい数といわれる2, 3, 6, 8の数字と重なる日を選ぶ。広東語で2は「益」や「易」と、3は「生」と、6は「禄」と、8は金持ちになるという意味「発財」の「発」と同じ音だからである。例えば28日は「容易に発財できる日」となり、企業の開業セレモニーが多い。23日なら「容易に生める」から結婚式が多くなる。逆に4は音が「死」と同じで嫌われる。また、空き部屋のことを「空房」と言わず「吉房」というのも「空」が「凶」と同じ音だからである。

中国の漢字と日本の漢字は似て非なるものだが、漢字文化は私には親しみやすく、言語も思ったほど苦労せずになじむことができた。

歴史的には2000年以上の歴史を持つ町である。中国で最も古くに開かれた貿易港で、海のシルクロードの起点として栄えてた。古代交通路としてはシルクロードが有名だが、海上による交易の中心は広州であった。751年には鑑真和尚も広州を訪れている。宋、



元、明と国が変わっても広州の対外交易港としての地位は変らなかった。鎖国政策をとった清朝でも外国船に対して広州一港に限り通商を認めていた。アヘン戦争の舞台もここ広州である。アヘン戦争以降貿易の中心は上海へと移った。1924年、中国国民党第一回全国大会が広州で開かれ、国共合作が正式に成立した。同年革命軍幹部養成を目的とする「黄埔軍官学校」が創設され、校長に国民党の蒋介石が、政治部主任に共産党の周恩来が就任した。農民運動の指導者を育成する農民運動講習所も設立され、毛沢東もこの

所長を務めたことがある。その後1938年、広州は日本軍により占領された。

中華人民共和国成立後、広州は広東省の省都となり、国で唯一の輸出商品商談会、広州交易会が開催され、以降毎年春と秋2度の開催となり現在まで続いている。この時期は広州のホテルは満室となり、普段の2倍から3倍の料金になる。一年分の稼ぎをこの時期に稼ぐといわれている。現在では中国三大金融センターの一つとして、中国経済の重要な地位を占めている。

いろいろと調べてみると広州が世界史や中国史、日本史と多くつながっていることを感じ、興味深かった。幸いに在職中に副読本改訂の作業をやらせていただき、歴史や文化、生活のことなどを数多く調査することができたことは勉強になった。

3 広州日本人学校

1872年に日本と中国の間で国交が回復すると、中国で暮らす日本人が少しずつ増えてきた。1979年、外国と協力して工業を近代化させようとする改革開放政策が中国ではじまると、だんだん広州で仕事をする日本の会社（日系企業）が多くなり、それにつれて広州に住む日本人（在留邦人）の数が増えてきた。そして、広州で仕事をする日本人が増えるにしたいが、その子どもたちが安心して勉強できるように、学校をつくろうと考えるようになった。

1982年10月、その当時広州に住んでいた日本人の努力の結果補習授業校が東方賓館に開校した。児童3名、講師1名でのスタートだった。このころの子どもたちは、ふだん中国の学校やアメリカンスクールに通い、1週間に2日間、午後3時ごろから補習授業校に来て、算数や国語の勉強を中心に学習していた。

1990年からは児童生徒数も増え、新しくガーデンホテルの14階で3クラスがいっしょに学習するようになった。1991年3月には、今の校歌がつくられ、翌年の1992年10月には、補習授業校開校10周年記念式典が行われた。補習校開校10周年記念校舎の建設が始まる。





1995年広州で暮らしている日本人のみんなの願いから補習授業校が広州日本人学校になった。児童生徒数19名教職員10名でスタートした。

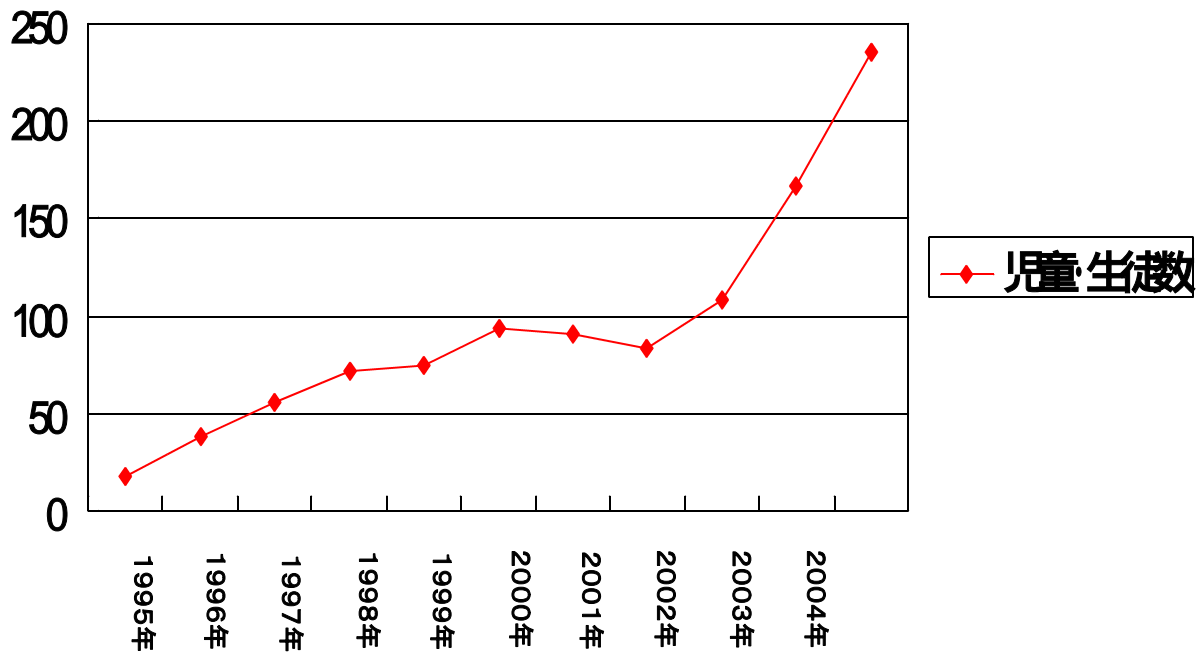
1997年4月学校は、中信ビル5階にたくさんの教室をつくり、学習できるようになった。

さらに、2002年には、児童生徒の数が増え続けたため、広州日本人学校の

校舎を今の産業開発区科学城内に建設することが決まりました。そして、2003年7月1日に今の中学部校舎へと学校がうつされた。今まで、中信マンションから歩いて学校へ通っていた人も、みんなバスや自家用車で学校へ通うようになった。



2005年には、広州日本人学校創立10周年記念式典が行われ、同時に今の小学部校舎が増築された。工事は1年間かかり、その間に新しい運動場で第11回の運動会が行われた。クラスの数も1学年1クラスから2クラスにかわり、たくさんの児童生徒が新しい校舎で学習するようになった。学校に入るバスも15台になり、新しい小学部校舎の1階が駐車場になった。



【広州日本人学校の特色】

(1) 在外教育施設を生かした教育活動

・小中合同の活動

授業をのぞくほとんどの活動が小中合同で行われている。小学校と中学校の境目がなく、上の子が下のこの面倒を見たり、まとめたりすることがごく自然にできていることに驚いた。異年齢集団の関わりがここでは濃く、良い雰囲気をつくりだしている。

・遠足

中国ならではのテーマパークや動物園、など中国文化を感じさせる場所を選定することができた。

・中国の文化伝統を学ぶ会

中国雑伎、中国楽器演奏、獅子舞など中国文化を知る活動が年に1回催される。このときは保護者も参加し、体験などもあり、盛り上がる。



・修学旅行

小学部は香港やマカオ、中学部は上海や北京へ向かう。集団行動を学ぶとともに、中国の文化にも触れることができる。

・現地校との交流

年2回の交流を実施している。訪問交流では中国の学校におじゃまし、学年ごとに決まったテーマで交流をした。招待交流では日本人学校に招き同様に交流をした。YOSAKOIの交流をしたときに、お互いにメイクをし合っている現地校の子どもたちと日本人学校の子どもたちを見て、取材にきていた新聞記者の方が言った言葉が印象に残っている。「お互いにメイクをしているところを見ると、こっちの子ども（現地校の子ども）と日本人の子ども同じアジア人だなとおもうよね。中国人も日本人もそんなに変わりがない。そんなことが感じ取れる活動ですね。」と。確かにその通りだと思ったし、子どもたちも感じる部分があったらと思う。現地校との交流は在外ならではの。



・縦割り集会

毎週のように縦割り集会を持った。運動会もその縦割りチームをもとに行われる。1年間にわたるゲーム集会等を通して団結力をはぐくみ、年間順位をつけるなど活動も工夫されていた。リーダーは中学生だった。中学生を中心に小学校1年生から全員が参加していたので驚いた。

(2) 日本を感じさせる教育活動

・学習発表会



1年間の集大成として毎年2月に行われている。一つの大きなイベントなので、普段の学習の発表の場であることをメインに考え、ステージ発表を行った。保護者共々楽しみにしている活動である。

- ・ 端午の節句、ひなまつり・七夕・節分・中秋節 節目節目で日本の文化を学ぶ場を意識的に用意した。子どもの中には日本での滞在経験がまるでない子や少ない子も多いので、積極的に取り入れて

いく必要があった。

(3) 体力維持に関わる教育活動

学校と家の往復、また帰宅後も自由に外出や遊びに出ることができない状況の中、どうしても日本の子と比べると体力的に落ちてしまう。少しでも運動の機会を多くしようと言うことでさまざまな大会が意図的に用意された。

水泳大会、運動会、持久走大会、お別れスポーツ大会、なわとび大会

(4) 徹底した安全対策

私が派遣されていた時期は脱北者の問題や反日運動の問題があった。そういうこともあり安全対策には格段の配慮が求められた。分掌の一つに安全対策があり、その担当者は担任を外れる。通学バス、校内安全対策、月1回の避難訓練、領事館との連絡調整などその仕事は多岐にわたった。校舎周辺には警備員が24時間駐在しているが、校舎にも施錠、1階の窓には鉄格子を取り付ける、また1階には普通教室は設置しないなど、私の在任中も次々と改善されていった。在任中に大きな事件や事故が起きなかったのはとても幸いであった。



4 現地教育事情

機会があったので現地の教育事情を調査してみた。中国は改革開放政策により著しい進歩を遂げている。現在中国ではいかに良い教育を受けられるかが将来の成功につながるという考え方が根強いし、実際にしっかりとした教育を受けるか受けないかでは雲泥の差が存在する。

【幼稚園】

現地幼稚園と外国人向け幼稚園（日本人幼稚園も含む）があった。現地幼稚園も普通の幼稚園と英語や音楽などを特化して教える幼稚園と2種類が存在した。私が取材

したのは「M I L O 中英文幼稚園」で、生活上は中国語だが、授業の多くが英語で行われていた。もちろん国語や算数や芸術などの授業も時間割の中にはあった。富裕層をねらった幼稚園である。語学は広州人のなかでも関心が高く、語学教育は熱心に行われていた。その幼稚園は中国人を始め、香港人、韓国人、日本人の子どもが通園している。もうこの段階から財力による教育格差が歴然と存在する。



【小学校】

東風東路小学を取材した。中国でも社会の進歩に伴い、今までのやり方では対応が難しい面が出てきた。新しい考え方を取り入れていく必要があるとの考えのもと、古いものを新しく変えることによって中国の発展に寄与しようと努めている。東風東路小学は広州市内でも屈指の教育レベルをほこる学校であり、その教育レベルも高い。日本人学校との年2回の交流も積極的にやっていただいております、日中の草の根的交流にも積極的である。



(1) 個別の知識よりも総合的な能力の育成

個別の知識はもちろんのこと、その知識を使い、いかに創造的に考えていくかということに教育の主眼を置いている。日本で言えば「横断的な学習」ということにならうか。これからの時代は新しい局面にであった時に、創造力が一番大事だとこの学校は考えている。

(2) 各方面で活躍する子どもたち

学力テストはもちろんのこと、絵画や書道、舞踊、体育、などさまざまな分野で優秀な生徒を育成し、良い賞をとっている。学力のみに偏らず、さまざまな分野の創造性を生かした教育をおこなっている。

(3) 教育をささえる施設

コンピュータ室はもちろん、視聴覚室、放送室（TV局並み）、音楽室（西洋音楽から中国の伝統音楽まで）、舞踊室などハード面でも充実している。圧巻だったのは各自にノートパソコンが与えられており、自分の進度に合わせて放課後の学習ができるようになっている。教師は一人一人の不足点を、客観的に把握することができる。そのノートPCは各授業でも使われている。「ノートを出して！」と言うかわりに「ノートPCを出して！」といったところである。



(4) ソフトとハード

ソフト面とハード面がうまく機能して効果的な教育が展開されており、中国の教育レベルの高さを実感した。

【中学校】



取材した育才中学校は2004年から新教育課程に切り替わったという。

(1) 新教育課程の特色

以前は教師主体の考え方に立っていたが現在は、生徒中心の考え方に立ってきている。一言で言えば考える力や想像力の育成が大きな柱となる。

(2) 具体的内容

- ・教科書の改革：以前は難解な内容であったが簡単で分かりやすいものになってきた。
- ・現在は移行期で中学3年は北京の教科書、中学1,2年は上海の教科書を使用している。現在広州市ではすべて上海の教科書を採用している。地域によって使用する教科書はちがう。

(3) 新教育課程下の社会科の変化について

- ・1年生は地理と歴史と心理学を学習する。2年生は地理、歴史、法律の学習、3年生は歴史と政治を学習する。単位時間は地理80時間、歴史80時間、政治等(日本で言う公民)150時間である。
- ・特色は活動的な学習(アクティビティー)が多くなった。比較分析能力の育成し、公民たる道徳教育も同時に行っていく。人格を育てることを目標とする。小さい時から社会を学習し、法を守る意識を育て、自国を愛する心を育てていく。
- ・社会科でも想像力の育成は重要な課題になっている。実験、活動を多用し知識中心にならないように工夫している。
- ・また課外活動で生徒自ら教材を作っている。自分で学習を指定部分の教材を自分で作ることによって、深まる学習ができる。



(4) 育才実験中学の特色

想像力の育成のため「特色クラス」というやり方をとっている。国語が好きなら「国語クラス」数学が好きなら「数学クラス」というように特色により生徒を分けている。時間割は同じであるが、授業内容の深さや難易度が違う。休みの日には、自分の特色クラスの宿題のみをやることになる。特色クラスによってそれぞれ違う宿題ということになる。

(5) 考察

- ・中国でも知識重視の教育から考える力や、想像力重視の方向に変化していることが実感できた。それはやはり改革開放ときいても切り離せない。世界を相手に活躍する時に知識だけでは対応できないことを国家もとらえている。工夫したり考えたり、想像したりする力(イマジネーション)がないと経済の分野でも発展できないという意識が教育改革につながっている。
- ・日本も知識重視や偏差値重視の教育から脱却を目指すために様々な改革を試

みてきた。ということは日本と同じ道をたどっているということだろうか。わたしは同じではないと考えている。今ここ中国で暮らしてみて、中国人のパワーはひしひしと感じる。知識重視からの変化はあるとはいえ、現地校では毎日たくさんの宿題が出て、遊ぶ時間もないと聞いている。広州では夕方、外で遊んでいる子どもは日本人だけだという話まである。たくさんの学習時間を保ちつつ、想像力を身につけた中国人がどんどん育つことになる。とてもすごいことである。また、夢と希望に満ちている学習意欲も旺盛である。ここが日本と違うところだと思われる。

- ・日本も中国も同じ目標に向かって教育改革をしているが、その方法や背景には違いがあった。その違いがどのような変化をもたらすのか、楽しみである。



成績優秀者は張り出される！

【大学】



今回の調査は私立ファーリエン大学。中国では珍しい私立大学である。ここは中国では専科大学といわれる3年制の大学である。創立は1990年。学部は日本語学部を始めとし、語学系、芸術系、工学系、体育系と多岐にわたる。在籍学生は7000名を超える大学である。大学ということで社会に出て即戦力として使える技能や技術を身につけるカリキュラムになっている。主に見学させていただいた日本語学部では日本語の授業のほかに物理、科学、生物、政治、歴史、地理、英語などの教科も行われている。日本語学科にもかかわらず日本語にあまりふれたことのない学生が多いので、数年前から日本人の教師が採用された。現在は4人いる。最終学年の3年生で授業をされている。日本語の授業は文章読解から、会話文まで工夫されている。たくさん日本語を話せるような環境が整えるのがこれからの課題であろう。施設的には、10階建てくらいのマンションを5、6棟買い取り、1、2Fを教室、3F以上を学生宿舎としている。通いの生徒はほとんどいない。冷暖房も完備されていないし、4、5人が相部屋で、部屋には一人一人の机はないので設備面では十分とはいえないが、学生の意欲が高く、現在の発展する中国の原動力になっているのが感じられた。豊かになりたいという中国の気風がこの大学にもあった。中国にはまだまだ貧困層が多い。これからも次々と都市に出てきてよい教育を受けて、発展していくことだろう。



5 おわりに

日本人学校はうわさには聞いてはいたが、やはり激務だった。それでも外国で暮らす子どもたちはたくましく、元気をもらった3年間だった。外国だからできることと、外国だからできないことがあり、私たち広州日本人学校の教師は「外国だからできること」を全面に押し出して教育活動を展開してきた。現地校との交流もしかり。反日運動が激しかった年でも交流会が中止になることはなかった。市民レベルというか、一般の人たちはみんな冷静に判断していた。わたしたちも中国に住まわせてもらっているという気持ちを大切にしながら過ごした。中国語の授業も社会科見学も遠足も修学旅行も、中国を意識しての教育活動だった。そこで培われた国際感覚が子どもたちにとって将来役に立ってくれるのではないかと思っている。一方で日本の文化を積極的に活動の中に取り入れることも忘れなかった。節句、七夕、中秋など。限られた状況の中でベストと思われることを考えていくことが大切だということを再認識した。

広州での生活を振り返ると、思い浮かぶキーワードが、「国際結婚 オリンピック 旅行 歴史 銀行 中国アジアカップ 公害 自動車 報道規制 経済 大学 軍 輸入食品 反日 脱北者 愛ちゃん 外務省職員自殺 旧正月 教育 マナー 詐欺」などである。すべてその当時のニュースや経験した出来事で、衝撃を受けたり、考えさせられたりした言葉である。

反日運動の時の日本では連日報道されていたようだが、現地ではそれほど危険は感じなかった。もちろん領事館が入っているホテルの前や運動公園などではデモが行われていたが、それ以外のところでは普通に買い物もできたし、日本人だからと言って危険な目に遭うようなこともなかった。中国人も日本人もほとんどの人は冷静に対処していた。そういうことは決して報道されない。現場と報道の温度差も肌で感じることができた。

文化の違いに直面したときの驚きが多く、またそれが楽しかったような気がする。肌の色や顔つきが日本人と似ているけれど、考え方が大きく違う場面に何回も出くわし、大陸的なものの考え方に直面したときはとまどった。はじめはイライラすることもあったが、違うと言うことを理解すると生活はまるで苦ではなく逆に楽しいものとなった。

国際理解はまず相手を理解すること、という原則を体で理解できたこの3年間は私にとって教師としての力量上も人間的にも大きく成長させてくれるものであった。と同時に次は日本にいる子どもたちにどのように還元をしていくのか、これがこれからの私のテーマとなった。